

し去りて海に注ぎ、其流水を容易に稻田灌漑の用に充るゝ難きに由り、多くは人工に籍り山間又は平地に大堤を築き流水を潑し、池又は沼と爲し、水閘を設け田水灌漑の用に供せり、而して池沼の大なるもの讃岐に在ては三谷池、一名三郎池の稱ありて山田郡三谷村の南に位し、花崗岩及び雲母安山岩より成れる小正の窪所に湛へ、鍋井、神前の三村に跨り志度より北山田に至り、花崗岩より成れる山間の水を集め周圍壹里三十四町に達し、高松の東なる木太村へ過ぎ海に入る詔田川の水源となす、野間の池、寒川郡末、乙成れる山間の水を集め周圍壹里三十二町あり、神内池、山田郡神内村に不規則の形狀となして花崗岩の窪所に湛へ、小田池、内川の三村に亘り不規則の圓形となし、其周圍壹里三十二町あり、神内池の東に位する花崗岩の効みに溜り橢圓形となし、新池、香川郡内原及び川東上の二村に跨り、花崗岩に、男中間池、三木郡池戸村の北東沖積地、城池、山田郡東植田村の花崗岩の窪所、公淵池、山田郡東植田村の沖積地内にありて周圍壹里に餘れり、大にして周圍十七町あり、等ありて淡路に於ては浦壁三郎、一名大池と稱し、周圍十八町、上田二郎、三木田三郎、物部太郎、志筑四郎、等ありて皆地名を冠し其所在を示せり、

(未完)

## ●富士山氣象觀測報文

(承前)

### 氣象概況

野 中 至

狀勢前項に述ふるか如く加るに初め氷雪に閉ちられ外出すること能はざりし爲風向雲形雲量等僅かに窓より天の一方を窺ふに止まりしを以て觀測意の如くならず又予か病臥後一週間計りは自ら事を執る能はざりしたため二三の條目欠測せしものあり要するに十月中旬までは霧雨及び雪の降ること比較的多かりしか爾後は雨は勿論霧雪の如き甚た少なく雲すら我頭上に現はるゝこと稀有にして晝夜共に多くは晴朗なりしに拘らず山麓は白雲殆ど絶ゆることなかりし次に風力に至りては暴風と稱すべき程のものは一回もあらざりしと雖も滯在中凜々たる朔風怒號せざる日とては一日もなく恰も常に怒濤の傍に住するか如き感ありし惜かな前述の如く器械に故障を生せしたため欠測せしを以て茲に正確なる風速度を記する能はざるは遺憾なり而て其方向は同月中旬までは一定せざりしか爾

後は西と北との間に止まり偶々南東若くは東より來ることあるも斯は極めて稀有にして此時は大率温暖にして霧又は雪を伴ふこと多し尤も冬季の降雪は春季に比すれば其量少なきにはあらざるか而て降雪若くは濃霧の後氣壓低下し風最も徐かに西若くは北西より來るとき氣溫の低下すること殆ど通例なるか如し而て平地に於て強風と稱すへき程の風山頂に於ては一ヶ月間僅かに三四日を除くの外晝夜間斷なく吹續くれども平地に於ては冬季は必しも山頂に於るか如くならざるか如し然るに山上に於ては風力殊に強きを以て考ふれば上層の大氣は從て暴風的作用を感ずることも亦殊に大なるを見るか如し次に氣溫は十一月に入りて著しく低下し中旬に至りて最低氷點下二十七度八分に下り全月廿日即ち和田技師の一行登山の頃は少しく上昇の方なりし又氣壓の如き初めは四百七十耗前後なりしか後には四百五十耗に下り尙ほ漸々低下の傾ありしも器械に故障を生し其正鵠を得る能はざりし故に今回は殘念ながら唯其大略を述るに止め氣溫のみに就て其結果を報告することゝ爲せり

氣溫の變化

明治二十八年九月三十一日夜半より十二月二十一日夜半に至る隔時觀測の氣溫を調査するに其觀測時に於る平均は左の如し

| 觀測時 | 十月       | 十一月       | 十二月       |
|-----|----------|-----------|-----------|
| 前二時 | (一) 三、九三 | (一) 一〇、一二 | (一) 一六、七〇 |
| 前四時 | (一) 四、一四 | (一) 一〇、三九 | (一) 一六、八三 |
| 前六時 | (一) 四、二八 | (一) 一〇、四一 | (一) 一六、八四 |
| 前八時 | (一) 三、九〇 | (一) 一〇、〇九 | (一) 一六、二八 |
| 前十時 | (一) 三、二九 | (一) 一〇、一二 | (一) 一五、九六 |

|   |    |     |      |     |       |     |       |
|---|----|-----|------|-----|-------|-----|-------|
| 正 | 午  | (一) | 二、七三 | (一) | 八、九九  | (一) | 一五、〇一 |
| 後 | 二時 | (一) | 二、二三 | (一) | 八、七七  | (一) | 一四、四四 |
| 後 | 四時 | (一) | 二、〇六 | (一) | 八、六八  | (一) | 一四、九〇 |
| 後 | 六時 | (一) | 二、九一 | (一) | 八、七六  | (一) | 一六、三〇 |
| 後 | 八時 | (一) | 三、四五 | (一) | 九、三〇  | (一) | 一六、三七 |
| 後 | 十時 | (一) | 三、七七 | (一) | 一〇、一二 | (一) | 一六、三九 |
| 夜 | 半  | (一) | 四、〇一 | (一) | 一〇、一六 | (一) | 一六、四七 |

是に由て觀れば十月より十二月に至る間に在りては氣溫の最低は午前五時前後に在りて其最高は午後四時頃に起るを知る且一日中の平均較差は僅に二度内外に過ぎずして平地に比すれば寒暖の狂ひ甚た寡なきに似たり然れども絶對の兩極より之を觀れば山頂と雖ども時に大なる變化を現はすことあり乃ち左に示す所は予か滞在中觀測し得たる最高最低の絶對氣溫及び絶對較差にして山頂に於ける氣溫の激變を窺ふに足るへし

| 月   | 平        |          | 均    | 絶        |          | 對     | 起    |      |      |
|-----|----------|----------|------|----------|----------|-------|------|------|------|
|     | 最高       | 最低       |      | 最高       | 最低       |       | 絶對最高 | 絶對最低 | 絶對較差 |
| 十 月 | 〇、〇二     | 六、二九     | 六、三〇 | 四、八一     | 二、三六     | 二〇、五一 | 一日四日 | 二十八日 | 三十一日 |
| 十 月 | (一) 七、三三 | (一) 二、二八 | 五、八二 | 〇、〇一     | (一) 二、四  | 二三、〇三 | 三日   | 十四日  | 二十二日 |
| 十 月 | (一) 二、六〇 | (一) 一、九四 | 六、七〇 | (一) 四、三一 | (一) 二、七八 | 一五、三四 | 四日   | 十四日  | 十五日  |

明治二十九年十月十日發兌

本表に依れば予か滞在中氣溫の最も高かりしは十月一日及び四日にして共に氷點以上四度八分に昇り又其最も降りたるは十二月十四日にして實に氷點下二十七度八分に達せり之を以て推考する時は二月若くは三月に於ては氣溫は遙かに氷點下三十度を降るも亦知るへからず而て一日中の寒暖差は平均六度を超ゆること稀なりと雖ども十二月十五日の如き稀に十五度に及ふことあるを記臆せざる可からず

氣溫の高度に對する變化は幾多の問題に關係あるを聞けり仍て予か滞在中山麓沼津測候所に於て觀測せられたる定時六回の氣溫と山頂のものとを比較し高度一百米に對する遞減率を算したるに左の結果を得たり

| 時 | 刻 | 十 | 月    | 十 | 一 | 月    | 十 | 二    | 月 |
|---|---|---|------|---|---|------|---|------|---|
| 前 | 二 | 時 | 〇、五二 |   |   | 〇、五一 |   | 〇、五一 |   |
| 前 | 六 | 時 | 〇、五二 |   |   | 〇、四九 |   | 〇、五一 |   |
| 前 | 十 | 時 | 〇、六三 |   |   | 〇、六六 |   | 〇、六九 |   |
| 後 | 二 | 時 | 〇、六四 |   |   | 〇、六六 |   | 〇、七二 |   |
| 後 | 六 | 時 | 〇、五六 |   |   | 〇、五七 |   | 〇、六八 |   |
| 後 | 十 | 時 | 〇、五三 |   |   | 〇、五四 |   | 〇、六一 |   |
| 平 | 均 |   | 〇、五七 |   |   | 〇、五七 |   | 〇、六二 |   |

則ち百米を昇る毎に空氣の溫度は平均〇、六度を減する割合にして殊に嚴寒に際しては其減率稍増加するもの、如し

然れども一日中に在りては氣溫の最低時に於て最少に達し最高氣溫の時刻に於て最多に達するもの、如し

## 食料及び飲料水

食物は獸肉魚肉海草類乾物漬物青物酒類糖類香料等出來得る限り種々攜帶したり特に白米の如きは最も精良なるものを選び東京より之を廻送せり予は性來酒を好まざるを以て之を用ゆること極めて稀なりしも青物の如きは少くも隔日には必ず之を喫することを務めたり凡そ食料品は人各嗜好あり強ち一定すること能はずと雖も縦ひ嗜好品たりとも一品にして多量なるは自ら嫌厭を來すを免れず故に寧ろ一品の量少くとも種類の多きを可とす而て寒地に於ては脂肪の欠くへからざるは勿論なれども山上は平地に異なり胃を傷ひ易ければ如何に脂肪の欠くへからざればとて平地に於るか如く用ゆるは却て害あるか如し而て頂上に於ては古來飯は満足に炊き得られざるか如く傳ふれども過般實驗の未殆んど平地同様のものを炊き得るに至りたり然れども胃を傷はんことを畏れて常に粥を用ゐたりしか冬期は運動意の如くならざるため食氣振はす夏期頂上滯在中食氣寧ろ進むか如くなる能はざりし實驗によれば麥飯(俗稱挽割)は消化甚た宜しく而て米麥共に平地に於て豫め充分洗淨して携ふるを便とす而て山頂は空氣著しく乾燥せるを以て糖類の如き自ら乾涸して甘味を減し又梅干の如きも甚た乾き易く自ら酸味を減せしため豫算以外に費消したれば今後は諸食料品多くは其覺悟にて携へざるへからす而て酒醬油の如きは勿論其製法の精粗により凍結の度一概に定め難けれども醬油は氷點下二十四五度に於て清酒酢の如きは全十八九度に於て凍結したり

飲料洗滌雨水共に氷雪を融解して用ゆるは胃を傷ひ易さか如し實驗によれば夏季賽河原の一大岩石に多量の清水を湧出するあり九月下旬に至れば悉く一大氷柱に變ずれども一旦地中を灑過したるものなれば今後は降雪前に之を蓄積して以て飲料水に充てなは屋前の氷雪を用ゆるに比すれば幾分か勝る所あらんか過般之を實施するの力なかりしは遺憾とする所なり尙は將來は彼の「ラムネ」と稱するものなど備へ置かんは至極可なるへし

## 燃料及び燈油

暖爐は極めて軽くして運搬に便なる最も薄き鐵盤にて製したる烟筒附の簡單なるものなりしか夏期工事中薪炭の燃へ易からざるを訴ふるを聞きしに拘らす其燃え工合は豫期の如く毫も故障を見ず寧ろ燃え過るため時々加減する位なりし勿論冬季とても通常の竈或は爐又は七りんの類にては薪炭共に到底燃ることなし故に是非其烟筒を備ふるを要す予は又彼の遼東半島地方に行はるゝ床下の採暖法も當初一考せざるにあらざりし然れども空氣の乾燥せるため火氣なきすら逆上し易き頂上にて蒸氣ならばいざ知らず火氣を以て床下を暖め尙床上にても暖爐を焚きなば室内の空氣一層乾燥して鼻孔の腫物及び出血又は唇の龜裂等は過般の實驗によるも一層劇甚なるべしと信ずるがゆへに之を築造すると同時に逆上を豫防するの準備をなさゝるべからず兎に角費用の點に於ても過般之を試設して以て其成績を見る能はざりしは遺憾とする所なり然れども前項に述る所の賽河原の熱氣にして果して無害ならんには之を利用して薪炭を補はゞ唯に經濟上益する所あるのみならず生活上困難を感ずること尠かるべし過般は薪木炭石炭の三種を試用せしが其持久と熱度の高き點に於ては石炭を第一に推さざるを得ず然れども暖爐の石炭を用ゆるに適せざりしたため充分に其効を現はさしむること能はざりし而て木炭と薪とを比するに熱度に於ては薪は木炭に優るも持久の點に於て薪は木炭に及ばず故に終始薪を用ゐんとする時は莫大の貯蓄なかるべからず要するに薪及び木炭は山麓に於て需むることを得るも石炭は供給地遠隔せるため運搬に不便なれば今後は先づ木炭三分の二薪三分の一(薪は主として湯を沸し飯を炊くに用ゆ)の割合に貯ふるを便とす過般は三貫匁長さ二尺の新五十束正四貫目入木炭五拾俵と石炭は試に僅かに二百斤を携へたりしが實驗に依れば寒氣の進むに従ひ漸次費消の高を増し初め本年五月下旬までの見積り分も四月上旬には最早費消し盡すべきを感じたり

燈油は専ら石油を用ゐたり而て不慮に備ふるため粕油若くは樟腦の類をも携へたりしが滯在中石油は氷點下二十

四五度に及びて混濁したれども凍結する程のことはあらずしを以て能く點火することを得たり而て粕油に比すれば容易に凍結せず試に久しく戸外に曝し置きたれども終に凍結するを見ざりし

### 被服

薪炭は充分に費消せしに拘らず家屋の構造尙は精密を欠きたため暖爐の熱氣室内の狭小なるに拘らず平地に於るが如く全部を充分に暖むること能はざりしゆへに身体の暖爐に向はざる部分は衣服氷の如く冷かなるを以て晝夜四五の懷爐を以て之に補ひたり而て夜着小夜着は勿論毛布の如きは拾數枚を具へしか時に猶ほ不足を憾したり然るに毛布は風を透し木綿の織物は著しく冷氣を覺ゆるを以て今後は「フランネル」の類にして眞綿の如き成るべく輕且暖なる夜具と綿入の筒袖類を具ふるを可とす予は滯在中實用上に於て大に支那服の寛濶にして防寒には最も適當なるべきを信じたり而して山頂にては氣壓の低下冬季は夏季よりも尙ほ甚しきかゆへに夜具又は衣服の重く且つ究屈なるものは胸部を壓迫して時に呼吸の困難を覺ゆ故に毛布の如き其量を云へは輕量の部類なるを以て風を透すの點に於て少しく欠る所あるも充分に貯へ置かざる可からざるは勿論なり

### 衛生

前述の如く飲料洗滌兩水共に總て氷雪を融解するの外得る能はざるかゆへに釜壹杯の湯を得んには殆んど半日を費すのみならず多少の薪炭を要するを以て健康を害すべしとは知りつゝ到底沐浴すること能はす僅かに体を拭ふに止まりし此の如き有様なるを以て被服類の洗濯は思ひも寄らぬことなれば「シャツ」股引の類其他肌に觸るゝものは豫め數多準備して時々之を脱換へたり又運動の如き日々二三回戸外に出て、太陽の光熱に觸れよ新鮮なる空氣を呼吸せよ又少しは發汗する位に勞働せよ抱有志者の注意を受たれども皆是れ平地の想像にして到底山頂に於て日々容易く行ひ得へき所爲にあらす勿論少しも戸外に出てさらんは衛生上極めて宜からすと雖も山頂は如何な

明治二十九年十月十日發兌

る晴天にても戶外運動を爲し得へき無風の日とてもは極めて稀なりし是を以て強て寒風を冒して外出するも殆んど太陽の光熱を感じることなく却て徒らに身体を寒冷ならしむるに過ぎずして更に愉快を覺ゆるとなし加るに平地に於るが如く体温の發作する程に強て勞働するときは爾後の疲勞平地に於るより甚し是れ其氣壓薄弱なるか故に蒸發甚た劇しく呼吸切迫して長く勞働に堪へざるに由る是を以て今後と雖も戶外の運動は到底希望以外に措かざるへからざるか如し過般は先づ二時毎の觀測と日々の薪割室内操櫓若くは夕食後謠など發聲するに留め置きしか今後は彼の船員の船橋に於るか如く縱令短小なりとも廊下を建設し之を往復動運することとせは先づ適當の攝生法なるへし然るに今の地に在りては沐浴の點に至て用水の得かたきと多量の燃料を要することにより今後と雖も實に容易の業にあらず然れども前述の如く家屋を賽河原に設くるに於ては地中熱氣は湯を沸すに餘りあれば經濟上衛生上兩ながら宜しく乃ち熱氣は恰も觀測所の爲に残存せるものゝ如くなるへし果して然らば高山觀象臺の歐米に在るもの其數少なからずと雖も其位置の恰好に於ては唯一と云ふも蓋し誇言にあらずるへし

予は初め六回觀測の囑託を受たれども聊か思ふ所あり私に十二回に變更せしか到底一人にて堪へ得へきにあらずるかゆへに窈かに後悔せしも偶々荆妻の登山により爾後は觀測時に固く喚起すへきことを命し間を偷んで晝間安眠を得したため十二回の觀測は下山の日まで續行せしか荆妻も十一月四日頃より逆上の爲め扁桃腺炎に罹り發熱甚しく發音さへ成り難く湯水も咽喉に通せず一時苦境に陥りたれども幸に手療治にて稍快癒するに至りしか続て全身浮腫を來し再び臥床するに至れり後葛粉と小豆のみを用ゐて僅かに同月下旬に至りては腫浮減退して全く常体に復したり然るに此頃より予も亦浮腫の氣味あるを感せしを以て二食の内（食事は漸次減して十一月に入りてより一日二食に改めたり此頃は既に粥二碗と葱又は麩の汁物一杯に一二の梅干薤の類を添食するに過ぎざりし然れども平素小食を練習し置きたれば更に餓を感せざるのみならず却て半碗を過すも食後胸苦しきこと言語に盡し難



ければ猶ほ食慾はあれども務めて之を食せざること有りたり而して過般は諸事多くは整理せず爲に身邊愉快を欠き勝ちなるか故に食事などは先づ遣悶の一なるに前述の如く食味少しもなきのみならず二食に止めざるへからざるに至りたれば聊か望を失ひしも温度の盛に低下する頃身体の衰弱せるにも拘はらず觀測に行くを以て唯一の樂とする位なりし一食は必ず葛粉のみ用ゐる後には二食とも之のみ用ゐたりし十二月中旬に至りては發熱甚しかりしも同月二十日頃(下山の前々日)は稍減解したるを覺へたり然れども予か病勢は妻に比すれば固と重かりしと見へ脚部に力なく從て歩行意の如くならず其狀恰も脚氣患者に異ならずさりし予は不虞に具ふるため大工道具又は採氷用鋸其他數種の藥劑をも携帶したれども僅に健胃劑及び下劑を用ゐし外他は之を服するの要なかりしは幸なりしも前述の如く意外の病に襲はれしため救急の術を施すに由なかりし而して該病症と殆ど同様なるへしと思はるゝ兆候は全年夏季登山中と雖も之れなきにしもあらずるか如し然れども夏日は戶外の運動其他平地に在ると殆ど同様なるを以て何人と雖も必ず浮腫を免れざる程のとなきは恰も登山者の頭痛に悩むものと否らざるものと之れあるか如し然れども冬季は夏期に比すれば前述の如く生活上大に其趣を異にするを以て從て比較的病に重きを來すにはあらずるか若し果して夏季の兆候と全様なるものとせば過般の病症は強ち直接に寒氣の爲にあらずして氣壓凡そ三百餘耗の差違ある地に入りたるため一時内外の平均を失するより身体に變狀を呈するかゆへに人により其病に輕重の差こそあれ多くは一時は免る可からざるものならんか勿論他にも其原因となるべきもの多々あるへしと雖も思ふに氣壓の低下は其主因中の主たるもの第二は運動沐浴等の歛亡にして衣食住の不變化身心の過勞寒氣の強烈等は原因中の薄弱なるものならんか而して妻の如きは山頂に於て現に常体に復したるをあるを以て見れば山頂と雖も之に馴るゝ時は夏時頭痛に悩み不快を感ずるものゝ二三日にして漸次回復するが如く内外の平均も之に馴るゝときは遂に常体に復するものには非るか現に「ヒマラヤ」の高原中央米國の如き常住地なるを見ても

明治二十九年十月十日發兌

稍や之を推想すべきものゝ如し要するに平地に於ると同様の生活を営みたらんには今後と雖も之に侵さるゝの患全くなかるべしとは俄かに確言しかたきも粗平地の生活と全様なる夏時に於て浮腫を來すもの現に重症に至らずして止むを以て見れば或は冬季と雖も夏季に於る兆候位にて免かれ得へき餘地全く之れなしとも斷定しがたし然れども夏のものと冬のものと果して全症なるべきや否は予が如き門外漢に窺ひ得べき筈なけれども愚考によれば兩者は粗全症なるものゝ如し又彼の病症は果て脚氣病なるべきや又其原因等に付て下山後醫學博士三浦謹之助の診斷書を得たれば御參考の爲め左に之を清覽に供す（診斷書は略す）

將來は以上略陳する所を參照し二三の技手日夜交代して事に從ふに至ては今回の如く登山前後共に比較的に身心を過勞し且つ運動沐浴等適宜を欠きたること多きにも拘らず寒中殆ど其半期滞在し得たるを以て之を推せば敢て至難の業にあらざるべし況んや婦女子の弱体すら猶ほ且つ之に堪へ得たるに於てをや予は當初電信若くは電話架設の如きも計畫せざるにわらずと雖も此地に在りては事業創始に屬するを以て其施設容易ならず到底微力の及ぶ所にわらざるを以て實は心中窺かに危みつゝ籠居せしかゆへに出來得る限り諸事注意を加へ小心翼々攝生の道を守りたりしに斯る失敗を招きしは畢竟予の不肖に歸するの外なしと雖も然れども資力と經驗の不足に起因して遂に家屋の狭小となり音信不通となり又は意外なる病の襲來となり爲に身体を害ひ大任を曠ふするに至りたるは洵に恐縮に堪へざるなり下山の狀況の如きは既に和田技師の報告に詳かなれば爰に之を略す

今や予は不幸にして目的を貫くこと能はざりし爲め精細なる報告をなす能はずと雖も滞在既に八十有餘日多少實驗し得たる所を參照して他日再び之を實地に施し今の曠任の罪を償はんこと希望に堪へず謹で復命す

## 追加

昨二十八年十二月下旬和田技師は山頂嚴寒中の最低氣温を驗測せんため觀測所内に獨國伯林のフュース作の第二

二〇〇三號ルザーフォード式最低寒暖計を裝置し下山せしが當時該器の標針は攝氏氷點下十八度七を示せり是れ  
全月二十二日午後一時四十五分なり今本年七月初旬登山該器を檢せしに昨年の裝置依然として異條を呈せず攝氏  
氷點下三十三度四を示せり是れ昨冬嚴寒の際劔峯に於る最低氣温とす而て風力計は壹杯を失ひしも猶ほ全部を失  
ふに至らずして廻轉し居たり雨量計小形の分は上部の筒紛失して見當らず多分後部の岩下に吹落したるものなる  
べし電池五個の内二個は全部龜裂して其用を爲さず其他の器械は毫も異條を見ず觀測所内は幾分の積雪ありしと  
雖ども各室單に著しく濕潤せるのみにして山頂休泊小屋等に比すれば積雪皆無と云ふも可なり要するに家屋は毫  
も損害を見ざりし

雜 錄

●日本砂金產地

紫 雨 生

金は古き品質岩層中 Cellular Quartz. の中に粒をなし存  
在するあり凝灰岩中にあることあり日本の如きは頁岩等  
の近傍より多く產出す而して砂金なるものは含金岩石の  
崩壊せるよりして川中に流入し比重多きにより砂の底に  
存在するものに外ならず地方の人此の砂礫を陶汰して金

片を取る今春其筋に就て本邦採掘の許可を得たるものを  
得れば今日の存廢如何を論ぜず列記して以て時節柄有志  
家の三省を促すこと爾り

| 國  | 郡  | 村  | 大字    | 小字                 |
|----|----|----|-------|--------------------|
| 日高 | 浦河 | 杵臼 | 幌別川   | △ゴルベツ              |
| 全  | 全  | 西舍 | 幌別川   | トブス                |
| 全  | 全  | 後柄 | シリエトモ | シロイツミゴロシユマ         |
| 全  | 全  | 杵臼 | 幌別川   | シユマン川メナシユマシユマシ     |
| 全  | 全  | 野深 | 元浦川   | ヒロカンベツの内外二字        |
| 全  | 全  | 新冠 | 高江    | タカエヒラ              |
| 全  | 全  | 横似 | 鶴吉    | 字アイニベツの内官地         |
| 全  | 全  | 砂流 | 幌去    | 砂流川 字ニセウ川よりペンケユクトラ |
| 全  | 全  | 幌泉 | 鹿野村   | 字シユナイに至る延長十六里      |
| 十勝 | 當縁 | 歴丹 | 歴丹川   | アウチ川筋 當縁川          |